

虫って何だろう？

その2



奈良・人と自然の会

目 次

1、夕焼け、小焼けの、赤トンボ、負わ・・・(トンボ類)・・・	1
2、お騒がせしています！(セミ類)・・・	2
3、秋の夜長を楽しみましょう(鳴く虫)・・・	3
4、菜食主義の権化(ハムシ類)・・・	4
5、池の中も百花繚乱、賑やかです(水生昆虫)・・・	6
6、何でも切り裂く牙の持ち主は？(カミキリムシ類)・・・	7
7、吸血鬼の王子様さま、王女さま(ナンキンムシ、ノミ類)・・・	8
8、見えているのは仮の姿(カイガラムシ類)・・・	9
9、であって虫でない虫(ダンゴムシ類)・・・	10
10、最近デビューしました(マダニ類)・・・	11
11、わが世の春、到来！(チョウ類)・・・	12
12、蝶の食べ物は？(チョウ)・・・	14
13、「みなさま、お騒がせしました」毛虫より(ブランコケムシ)・・・	15
14、サクラの樹は毛虫さんのごひいき(毛虫類)・・・	16
15、虫とは書くが、虫でない虫(ネコブセンチョウ)・・・	18
16、内弁慶、お家の中で深く潜行して、悪さをする(貯穀害虫)・・・	19
17、イモムシごーろごーろ(スズメガ類)・・・	20
18、私たちは虫の世界の警察官(捕食昆虫)・・・	22
19、ドングリは住みかとお食事どころ(シギゾウムシ類)・・・	23
20、一国一城の主(ゾウムシ類)・・・	24
21、寒さもなんのその(フユエダシャク類)・・・	25
22、狭きとも楽しき我が家(ハモグリバエ類)・・・	26

1、夕焼け、小焼けの、赤トンボ、負わ・・・

トンボと言えば子供の頃からの馴染みの虫ですが、何種類くらいご存知ですか？

シオカラトンボ、アカトンボ、ギンヤンマ、オニヤンマ、イトトンボと言ったところでしょうか？
世界では約 5000 種類知られていますが、日本には約 180 種います。

最も大きいのはオニヤンマで体の長さが 10 cm 前後あります。黒い体に黄色の虎縞模様があり、溪流や道の上を「我が縄張り」とばかりに肩を怒らせて低空で行ったり来たりしています。

逆に最も小さいのは長さが約 2 cm のハッチョウトンボです。ミズゴケの生えているようなきれいな清水が流れ込むような湿地の水たまりでヤゴが育ちます。生息環境の条件が厳しいので年々少なくなっており、奈良県では絶滅危惧種となっています。

皆様に最もおなじみのトンボはシオカラトンボでしょう。池底に泥が溜まっているような少々汚い水でも育つことができ、ならやまのビオトープ池でもヤゴが見つかっています。また学校のプールでもごく普通に見られます。



唱歌に出てくるアカトンボはナツアカネかアキアカネだと思います。学問的にはアカトンボはおりません。



体色が赤色、赤っぽいトンボの総称で、20 種くらい含まれています。

ならやまの池にもこの両種はおります。アキアカネは 6～7 月頃に発生しますが、すぐに荷物を纏めて山へ引越し、暑さが通りすぎて過ごしやすくなった 9～10 月頃に再び戻って来て、水田跡地の泥の中に産卵します。一方ナツアカネは 7 月頃発生し、移動はせず夏でも姿が見られます。この両種は大きさや体色がよく似ており、体の側面の模様で判別しますが

飛んでいる状態では難しいです。特に黄色っぽいメスでは区別が難しいです。しかしオスでは、ナツアカネは下戸がお酒を飲んだように頭から尾っぽの先まで全身真っ赤になりますが、アキアカネは胴体のみが赤くなります。

ナツアカネやアキアカネによく似ていて羽根の先が黒くなっているのは、リスアカネかノシメトンボでしょう（よく似た種類が数種あります）。

7 月にならやまのベースキャンプの上を群れ飛んでいる羽根の黒いトンボはチョウトンボです。池の周りにいる小さくて細長いのはイトトンボで幼虫も非常に細長いヤゴで、ならやまの池にもたくさんいます。



質問-1：トンボの生殖器がどこにあるかわかりますか？

質問-2：ヤゴは何を食べますか？

トンボの生殖器は、メスでは尾端に、オスでは長い胴体の付け根にあります。一見交尾器のように見えるオスの尾端はメスの頭をはさむためのものです。だから2匹連なって飛んでいるペアは前がオスで後ろがメスです。

ヤゴの食べ物は、主としてミジンコ、ユスリカの幼虫、イトミミズです。ザリガニと喧嘩をすればたぶん負けるでしょう

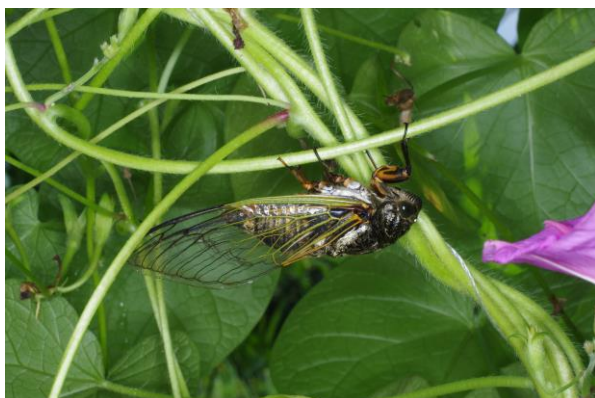


2、お騒がせしています！

「せみせみせみせみせみせみ・・・」毎日お騒がせをしております。夏の風物詩と言えば聞こえはよいのですが、皆様方にはうるさくて暑苦しいことと思います。しかし私たちセミ族男性にとっては、非常に重要なセレモニーで多くの女性を引き付けるために美声を張りあげ競いあっています。いい声でしょう！

「シャア、シャア・・・」と声がやけくそに大きいのはクマゼミさんで、近年温暖化とともに増加しています。まるっきり都会っ子で大阪市内の公園では最も勢力を伸ばしています。クマゼミでなければセミでないと言われるくらいに幅を利かしています。奈良でも市内の公園や住宅地で勢力を延ばし、アブラゼミと激しく競り合っています。晴天の日なら午前中に大声を張り上げ、午後は静かにしていますが、午前中が曇りか雨のときには喉の訓練のため午後にも発生練習をします。

我がセミ族で最も早く現れるのはハルゼミさんですが、最近ほとんど姿が見られなくなっていま



す。マツ林が縄張りですので、宅地開発や松枯れでマツ山が少なくなったのは痛いですが、マツの多い奈良公園で5月頃に注意すれば見つかるかと思いますが、ここしばらくお会いしていません。

やや小型のニイニイゼミさんは、昔は主流でしたが最近は少なくなっています。成虫はサクラやマツの幹が大好きですが、メタセコイアの幹にも抜け殻が多いことから幼虫はメタセコイアの根にも好んで寄生しているものと思います。

「カナカナ・・・」と鳴くヒグラシさんは少し山手に入れば普通に見られます。8月頃矢田山丘陵や

春日山の杉林にはいっぱいおります。スギの幹に止まっていますので簡単に手づかみでとれます。

アブラゼミさんは奈良ではもっとも幅を利かしていると思います。暑い日中は避けて、朝の涼しい頃と夕方にコンサートを開きます。奈良市内の公園、住宅地では抜け殻がいくらかでも見つかります。

ツクツクホウシさんはセミ連合の大合唱が収まりかけた8月中旬ごろ、秋がもうすぐやって来るよと鳴き始めます。



ミンミンゼミさんはそれほど多くはいませんが、低山地の林で見られます。チッチゼミさんは8月の終わりから9月に発生しますが、なかなか姿が見られません。

期間限定の合唱会を終えた私たちセミ仲間はつぎつぎに力尽きて地上に落下しますが、その頃にはメス成虫は尾端のノコギリで枯れ枝を切り裂いて穴を穿って1個ずつ産卵を終えています。ニイニイゼミなど小型のセミさんはその年の秋雨の降るころに孵化しますが、アブラゼミなど大型のセミさんは卵のまま冬を越して翌年の梅雨の頃に孵化します。



枝上で孵化した幼虫は高くて足がすくむような所でも一気に地上に飛び降りて地中にもぐります。そこから先は暗闇の世界で樹の根から養分を吸って成長します。小型のセミ仲間は2~3年後に親になりますが、大型のアブラゼミさんでは7年もかかってゆっくり成長します。

アメリカには17年毎または13年毎に発生する周期ゼミが3種類います。それぞれ発生年には足の踏み場もないほど大量に発生しますが、

それ以外の年には発生しません。

我々セミ族は成虫も幼虫もすべて樹木にお世話になっていますが、沖縄にはサトウキビにすべてを依存している1.5cm前後の小さなクサゼミさんがいて、農家の方には迷惑をかけています。申し訳ありません。

3、秋の夜長を楽しみましょう

暑い夏も終わり、皆様に夜長に良い声をお聞かせする鳴く虫たちのコンサートの季節となりました。クツワムシさん、スズムシさん、コオロギさん、みなさん楽器の手入れにおおわらわです。基本的には左右の前翅の付け根にある40~50個のヤスリをすり合わせて音を出しますが、手入れが悪くて良い音が出ないと観衆（女性たち）が集まってくれませんので、あだやおろそかに出来ません。



バッタ族と私たちキリギリス族とは緑色をしているところは似ていますが、私たちは長い立派な髭を持っていて、体全体に艶があります。

昼間の主役はキリギリスさんです。7月終わり頃から暑さにもめげず、草むらで「ギース・チョン」とギターを弾いています。体が大きくてやや太り気味ですが、うまく草の陰に隠れていますので、ちょっとやさっとでは見つかることはありません。草むらの中で「ジー・ジー・ジー」と鳴いている小さな仲間はササキリさんです。草むら内にがさがさと子供たちが網を持って分け入ってくると、あわてて真っ先に逃げ出すのは彼らです。

夜の主役となるクツワムシさん、ツユムシさん、ウマオイさんは全国的に名前が知れ渡っている有名人（虫）ですが、みなさん顔をご存知ですか？ 99.99%の方は知らないと思います。明るい表舞台には立たず、いつも声のみを聞かせています。



夜の主役に忘れてはならないのがコオロギ族です。キリギリス族に比べ、体がやや平たいのが特徴です。皆さんにも馴染みが深いのは、やや色が黒くて、体が丸々と太ったエンマコオロギさんです。名の通り少し怖い顔つきをしています「コロロ・・・リー」と良い声で鳴きます。

ツツレサセコオロギさんは体型が良く似ていますが、大きさはかなり小さいです。どちらも枯れ草が積んであるところでしばしばコンサートを開い

ています。顔の前面がナイフで切ったかのように平面になっているのはオカメコオロギさんか、ミツカドコオロギさんで同じような所にいます。

「リーン・リーン」と鳴くスズムシさんはあちらこちらのお屋敷で飼われていて、飼い犬ならず飼い虫です、知らない人はいないと思います。黒い体に白い長い触角があるのが特徴です。しかし野外でこの虫を見つけることはすくないでしょう。不法入国ながら勢力を伸ばしているのがアオマツムシさんです。緑色の大型の虫で庭木や街路樹の上で「チリー・チリー」と夕方よく鳴いています。在来のマツムシさんは褐色でいたって地味な虫で姿を見た人はほとんどないと思います。



最後にオケラさんは本当に鳴くのでしょうか？

やはり翅をすり合わせて「ジーー」と地味な声で鳴き、トンネル内で男性・女性間の交信にも利用しています。

4、菜食主義の権化

甲虫と言えば、カブトムシやクワガタムシを思い浮かべると思いますが、今回は徹底した菜食主義を貫いている地味であまり目立たないハムシ族を紹介します。漢字で書くと葉虫、親子とも

ども木の葉っぱや野草の葉を主食にし、ほとんどの種は人畜に対して無害で、つつましく生活を送っています。しかし仲間たちが 500 種もいると、ヒト族の住民といざこざを起こす事例も発生しています。

最もポピュラーな虫はキュウリ、メロン、カボチャの葉を齧ってコンパスで描いたように直系 1cm 前後の円で葉の表面を浅く齧るウリハムシ（成虫）です。長さ 5 mm 前後、黄色の長方形の甲虫で、人が近づくとこれはやばいと感じるのかパットと羽根を広げて飛び去るのでウリバエ（瓜蠅）のあだ名がついています。家庭菜園ではごく普通に見られます。幼虫は白いウジで、スイカの根が大好きで、地中の根に食い込んで内部を食い荒らします。元気であったスイカが梅雨明け直後に突然萎れて枯れるのはこの虫がおおいに関与しています。



キスジノミハムシは、ダイコン、カブラ、コマツナ、ハクサイなどアブラナ科野菜の小さな苗の葉



に直径 1~2mm の穴を穿ちます。2 本の黄色の縞模様をあしらった黒いスーツを着用した紳士です。後ろ足の太ももが異常に太く、丈夫で、怪しい人物が近づくとピョンと飛び跳ねて脱走を図ります。そのためノミハムシ（蚤葉虫）という名前を頂戴しています。子供さんは色白のウジですが、いつも地中に住んでいて、ダイコンの根の表面をかじって傷ものにするので、農家のおじさんやならやまの里山グループの面々からは嫌われています。

クコの葉を穴だらけにする犯人はご存知ですか？ トホシクビボソハムシと称し、親子ともども葉を主食にしています。成虫は長さ 5 mm 前後、やや痩せ型、地味な褐色の作業服を着た甲虫です。あまり目立ちません。葉の穴あけ作業に従事するのはもっぱら幼虫ですが、体色は汚黄色でいつも自分が排出した黒い糞の塊を背中に乗せて姿を隠しているので、泥の塊にしか見えません。

このように糞をかついで歩く虫にユリクビナガハムシがいます。栽培ユリや野性のタカサゴユリの葉や茎を食い荒らし、蕾までも食べてしまいます。近年あちらこちらで発生していますが、虫は泥の塊にしか見えないので見逃されています。

春先、垣根のサンゴジュの新葉がぼろぼろになるのはサンゴジュハムシ親子が楽しい晚餐を囲んだ跡です。

最近増えているのがヒイラギ、ヒイラギモクセイ（ギンモクセイ）、イボタの葉を食べるヘリグロテントウノ



ミハムシです。真っ黒な背広に 2 個の赤い目の丸模様を付け、ちょっと目にはテントウムシそっくりです。ヒイラギなどの新葉が汚くなっておればこの虫が活動した成果の現れです。

5、池の中も百花繚乱、賑やかです

9月27日の活動日にビオトープ池のアオミドロを掬い取っていたメンバーが変わった虫を見つけ、近辺にいた仲間たちとわいわいがやがやと検討した結果、どうもタガメの子供ではないかとなり、現物の虫を持ってこられました。茶色で硬い甲羅を備えていることからそのように思われるのは無理のないことでした。しかし残念ながらタガメではなくてコオイムシでした。



コオイムシは体長 20 mm 前後(タガメは 50~60 mm)、茶色の硬い甲羅(前翅にあたります)があり、環境省の準絶滅危惧種です。このビオトープ池で見つかったのは昨年度に続き今回で2回目です。メスがオスの背中に卵を数十個かためて産みつけ、孵化するまでオスが守る習性があります。2回とも成虫のみで繁殖はまだ認めておりません。たぶん空を飛んでいて、山の合間にある小さな池を見つけ、水浴びと何かうまい物はないかと期待し

て訪れてきたものと思います。

タガメは、昔はため池に普通にいたのですが、現在は絶滅危惧種となっており、その姿はめったにお目にかかれません。しかしタイでは普通に捕れ、すり潰して調味料として利用されています。

コオイムシもタガメもカメムシ類の仲間で、口は針状の長い管になっています。また、前足はカマキリの足のように生き物を捕獲する仕組みになっており、オタマジャクシや小型の昆虫を捕らえて生き血(体液)をすすり取っています。

この仲間は成虫と幼虫とでは大きさは違っても姿・形・色は良く似ています。幼虫では背面に将来の羽の元があり、成長につれて少しずつ大きくなりますが、十分に大きくなって成虫になる一歩手前でも、背中の後ろ半分にはまだ羽はなく胴体が見えています。最後の脱皮をすると羽の部分が出来上がり、甲羅のようになります(蛹の時代はない)。

このように生き血を吸う口ばしを持った大型の虫にはミズカマキリがいます。ちょっと目には名前のおりカマキリに良く似ており、スマートな長い手足(どれが手で、どれが足かはまだ伺っていません)があるのが特徴です。昨年度は2回ばかり訪問がありましたが今年はまだ一度もお見えになっておりません。何かうまい物の提供が必要かも！



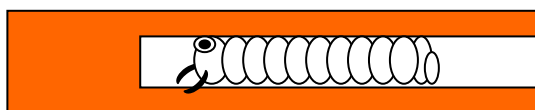
小型の虫はミズムシ類などがいろいろ見つかっております。生態で変わったものはマツモムシで長いオールのような足をもっていて、いつも逆さまになって泳いでいます。

ビオトープ池の生き物については、景観グループの池担当メンバーが中心となって月2回のペースで継続的に調査を行っており、面白いデータが集まっています。1年間のデータがまとまった時点で報告があるものと思いますのでご期待を。

6、何でも切り裂く牙の持ち主は？

カミキリムシをご存知ですか？ 長い触角をもった甲虫で、体長の倍以上の長さを持ったものもいます。行動するのに邪魔になるのではないかと思いますのですが、本人にとっては自慢の種のように、「大きなお世話だ」と言われました。また口には頑丈で鋭い牙を持っており、硬い樹皮でもがりがり齧って穴をあけます。ビーバーといい勝負かもしれません。手の皮などはたやすく切られますので不用意につかむと痛いめにあわされます。

幼虫は「テッポウムシ」とも呼ばれ、樹の幹内に住んでいます。黄白色のウジ状の虫で足は一本もありません。トンネル作りの名人で、硬い材の部分を食べ進んでゆき、内部を空洞にします。それゆえ、この虫を居候させている樹や枝は、風などでたやすく折れます。



安全な住居と豊富な食料の提供を受けた幼虫は 1 年後、ときには 2 年後に成虫となって樹皮に丸い穴をあけて脱出しますが、この穴が鉄砲で穿たれた穴と似ていることからテッポウムシと呼ばれるのですが、真意のほどはしりません。この丸々と太った幼虫はアジアやアフリカでは今日も食料として珍重されています。

皆様に最もなじみのあるのは、「ゴマダラカミキリ」でしょう。青黒色の地に白い小さな斑点を星のように散りばめています。カエデが大好きで、若い枝の表面を浅くがりがり齧りますので、枝の周りをぐるりと一周されるとその枝は枯れます。もちろん幼虫もこの樹が好物です。



コナラ、カシ、プラタナスなどの幹から木屑がこぼれ落ちているのは、「シロスジカミキリ」のお子様がトンネル作りをした成果？です。このカミキリムシは、大きさで日本で 1、2 番を争っています。

名前はよく聞くが姿を見せたことがない有名な虫は「マツノマダラカミキリ」でしょう。通称「マツクイムシ」と呼ばれるグループの大將で、マツ枯れを引き起こす犯人ともなっています。成虫が松の葉や枝を齧ったとき、体内に蓄えていたマツノザイセンチュウと言う糸状の虫が、カミキリムシからマツへと移動します。このセンチュウが松の樹脂道に住み着き、増えて、最終的に樹脂道を塞いでしまうと言われています。脳や心臓の血管が詰まって死亡するのと同じ現象です。それゆえ、葉が褐変し始めた樹では枝を折ってもヤニが出てきません。もちろん幼虫はこの樹で成長し、蛹から成虫になる段階でお友達のセンチュウを引き連れて飛び出します。



カミキリムシは日本には 800 百種あまり記録されており、そのほとんどが樹の幹や枝内に寄生します。しかし「キクスイカミキリ」のみ

はキク科の草花の茎に寄生します。5～6 月頃、キクの伸びだした先端部が萎れて垂れ下がっているのがよく見られますが、これはこのカミキリムシが茎を噛み切って卵を茎内に産んだためです。少し注意して付近の葉上を調べると長さ 1cm 前後、暗緑色で背中の一部が橙色の虫が見つかります。体は小さくても一人前で長いヒゲを持っています。

7、吸血鬼の王子さま、王女さま

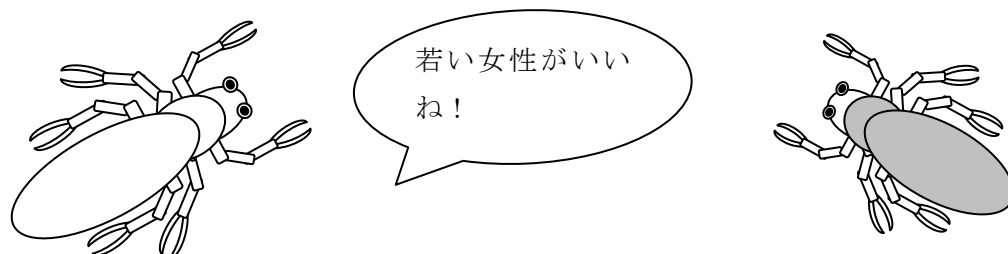
12 月の初め頃、NHK のテレビで「殺虫剤の効かない虫」という題で「スーパーナンキンムシ」が取り上げられていましたが、ご覧になったでしょうか？

人間の血液を常食にしている貴公子、ナンキンムシ、ノミ、シラミ、みんな昆虫の仲間です。懐かしい虫かと思います。これらの虫たちは、終戦直後は我が世の春を謳歌していましたが、DDT の頭、首筋への降りかけによって打撃を受け、その後衛生状態が改善されるにつれて生活の場を奪われ、減少の一途で若者では見たことがない人も多いようです。

テレビ放送によると、近年世界各国で殺虫剤に抵抗を持ったナンキンムシが増えつつあるとのことです。これらの貴公子たちは畳の隙間、ベッドの陰に潜んでいますが、バルサンなどの煙の殺虫剤で燻蒸することにより被害は収まっていました。この殺虫剤の成分は有機リン剤が主流でしたが、合成ピレスロイドが開発され、ゴキブリに対しても効果が高いことから、ほとんどの燻蒸剤がピレスロイド剤に変わりました。蚊取り線香もピレスロイド剤です。そこで全滅の危機に瀕したナンキンムシ一族は、この薬剤に対して抵抗力のある息子と娘を選び出し、優秀な？子孫を残すように仕向け、その成果が殺虫剤の効かない子孫の復活・繁栄です。

ナンキンムシはカメムシの仲間で、長い口吻で血液を吸いとります。それゆえ触ったり押しつぶしたりするとカメムシ特有の悪臭を出します。成虫も幼虫も同じような姿をしていて、昼間は畳や柱の隙間に潜み、寝静まった頃に這い出して美味しそうな獲物を探して食事を摂ります。目っこをつけられないようにしましょう。親戚のサシガメムシの仲間は毛虫などの昆虫の体液を吸っています。

シラミは主として哺乳動物に寄生して血を吸いますが、動物によって寄生する種類は異なっています。人間にはヒトジラミ（頭にはアタマジラミ、体にはコロモジラミ）とケジラミが付きまします。犬ではイヌジラミ、猿ではサルジラミです。手足の先はカニのはさみのようにつまむようになっていて体毛にしっかりしがみついています。羽がないので移動は歩行に頼っていますので、この虫を飼っている人とは仲良くしないほうがよいでしょう。



この虫によく似ていて鳥に寄生するのがハジラミです。口は噛むタイプでもっぱら鳥の羽をがりがり齧ります。そのため、鶏では神経質になり、卵を産まなくなります。

ノミは進化したグループにはいり、威張っています。成虫は羽がなくても丈夫な脚があり、体の何十倍の距離も一飛びです。幼虫は細長いウジ状の虫で、畳の隙間や下、柱の隙間などに住み、有機物

(ゴミ)を食べて成長し、蛹を経て丈夫な鎧をまとったノミ(成虫)になります。ゴミ屋敷、お菓子など食べこぼしの多い家庭、掃除嫌いな家庭は大歓迎です。招待されればすぐに飛んで行くそうです。種類は寄生する動物によって違います。人間にはヒトノミ、猫にはネコノミ、犬にはイヌノミですが、猫や犬を可愛がるとそのノミが人に飛び移ることがあります。ノミは、「しまった!」と反省するものの、美味しくはないが「まあ、いいか!」とボヤキながら愛犬家の血も吸います。ネズミに寄生するスナノミもしばしば人につきます。水の中にすむアザラシにも独特のノミが寄生します。

ノミやシラミは大切な大家が亡くなると急遽新しい住处となるカモをきよろきよろ探しまわりますので、動物の死骸にはよりつかないほうがベターです。

8、見えているのは仮の姿

長い口ばしで植物の汁を吸う三羽ガラス、アブラムシ・カメムシ・カイガラムシはいずれもお百姓さんや園芸愛好家から嫌われています。この3番目のカイガラムシは地味であり目立たないのですが、こっそりと悪さをします。幹や枝、ときには葉にいっぱい付着していてもまったく動かないので害虫と思われず見過ごされることが多いようです。



カイガラムシは漢字で書くと、介殻虫、外観がカキやハマグリのような形をしていることからこの呼び名がついたのでしょう。しかし、形は千差万別で、想像もつかないような形をしている珍奇なものもあります。

皆さんに最も身近なカイガラムシは植木に寄生するロウムシ類です。ツバキ、ゲッケイジュ、モチノキ、マサキなどの枝に直径5ミリ前後、白色、ロウの塊が花が咲いたように並んで付着しています。とくに車の通行の多い道路に面した垣根や街路樹でよく見られます。ロウを指で押しつぶすと赤い汁がでて不快です。また、この虫が住み着いている樹の葉や枝は黒く汚れているのが特徴です。煤病を誘発するからです。白色でなく、赤褐色〜チョコレート色のロウが枝にぎっしりと付着することもあります。色や形が宝石のルビーによく似ていることから、ルビーロウムシと呼ばれます。



ミカンの果実の表面に寄生するヤノネカイガラムシも有名です。無農薬栽培のミカンでよく発生し、果実の表面に矢尻形、紫色の小さなかさぶた状の物が付着していて、指でこすると簡単に剥がれ落ちます。

赤褐色の丸い玉状のタマカタカイガラムシもよく見られます。ならやまのウメの木でも2年ほど前に枝にぎっしりと寄生していましたが、テントウムシの襲撃を受けて気の毒にも全滅したようです。

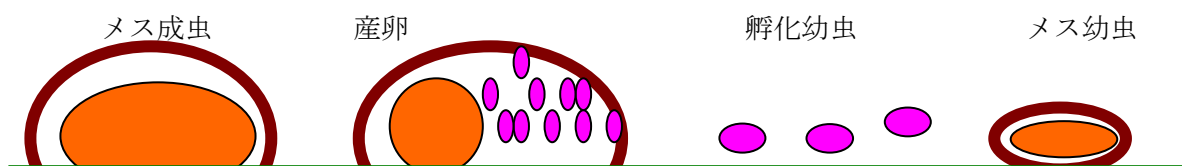
サルスベリの枝や幹に白色の俵状の物がいっぱいつくことがあります。これはサルスベリフクロカイガラムシで、煤病を伴い葉は黒く汚れます。サルスベリではアブラムシが発生しても黒く汚れます。



皆さんが見ているロウの塊や貝殻は虫本体ではありません。これは仮の姿で、虫が外敵や雨風から自分の体を保護するために体の表面から分泌した物です。真の虫本体はこの被覆物の下に潜んでいます。

オス成虫は羽根があつてふらふらと飛び回って浮気をしていますが、メス成虫はじっとお家（被覆物）を守り、決して自分から外へとび出すことはありません。それゆえ羽根はなく、足も退化してい

て歩くことも出来ません。交尾したメスは殻の下で数百個の卵を産みます。卵から孵化した幼虫は「お世話になりました」と言ってお家の殻から這い出してクモの子を散らすように四方へ散ってゆき、何処か気に入った場所を見つけると腰を落ち着けて汁を吸い始めます。栄養豊かな餌場を確保したことから足は退化し始め、ふたたび移動することはありません。メスになる幼虫はほとんど姿を変えずに成虫となりますが、オスとなる幼虫は蛹となり、ハエのような成虫となり、若い女性を求めて飛び去ってゆきます。



一般的にカイガラムシは寒がりやのようで、小さな幼虫は寒い冬を越せません。それゆえほとんどの種類は成虫の状態越冬し、春に卵を産みます。またいつも殻の下に潜んでいるので防除の難しい害虫のひとつです。

9、虫であって虫でない虫

皆さん方をはじめ多くの人が虫と呼んではいるものの、虫ではない虫を紹介します。

ダンゴムシは地面をうろうろして手を触れるとあわてて丸くボール状になる虫ですが、ムシとは言っても虫ではありません。腹をよく見てください。嫌がってすぐに丸まってしまうますが、願



いして足の数を数えさせてもらってください。7対（14本）ありますので、6本脚の昆虫とは違います。すなわちエビ・カニ・ザリガニの仲間の甲殻類です。

お庭や畑で見られるダンゴムシは、正式名称は「オカダンゴムシ」で、日本古来の由緒正しい虫のような振りをしていますが、実は明治時代に海外から無断で日本へ侵入してきた一族の末裔と言われています。乾燥に強かったことから縄張りを広げています。日本固有の種は「コシビロダンゴムシ」ですが、乾燥が苦手なことから

森林内に住んでいますのでまずお目にかかることはないでしょう。また海岸にはやや大型の「ハマダンゴムシ」が縄張りを持っています。

この虫が害虫かどうかで議論の対象になりますが、本来の食物は腐りかかった有機物で、自称お掃除やさんです。その点からは無害な虫といえますが、いろいろな草花、野菜類の葉も食べますので害虫ともいえます。とくに双葉が開き、本葉が開き始めた頃に被害が目立ちます。生え揃った芽が食い荒らされて全滅することもあります。



成虫も幼虫も同じような形をしており、羽が生えることはありません。成長段階で脱皮を繰り返しますが、一度に全部脱がずにまず体の後半分の皮を脱ぎ、ついで周囲の安全を確認してから残り前半分の皮を脱ぎます。そして脱いだ皮には貴重なキチン成分があるので捨てずにすぐに食べてしまいます。それゆえ、昆虫のような脱皮殻が残っていることはありません。

夜行性で昼間は植木鉢や石の下に潜っていて見つかりませんが、夜に懐中電灯を持って見に行くと、草花の葉に群がっているのが見られます。

防除対策は植木鉢、プランター、石の下にいる虫を片っ端から捕まえることですが、残念ながら皆



さんに捕まるのは運の悪いほんの一部の虫で、全滅させることは出来ないでしょう。園芸店では粒状になった防除薬剤があり、雨の降らないときを狙って地表面にばらまいておくと非常によく効きます。食べ物と思って食いついた気の毒な虫が翌朝には中毒死して地表面にごろごろと転がっています。全滅は出来ませんがしばらくはおとなしく謹慎するようです。

姿が似ているにも関わらずつついても丸くならずにこそそと逃げて行くのは「ワラジウムシ」という虫です。ダンゴムシと同じような所に住んでいて、腐りかかった有機物を食べています。海岸の潮の満ちてこない岩場の上を走り回っている「フナムシ」はワラジウムシの親戚です。藻や動物の死骸を食べています。ゴキブリのように逃げ脚が早く捕まえにくいですが、たまには水に落ちる？こともあるようです。ベテランのスィーマとは言いがたいですがフナムシ泳ぎで少しは泳げます。

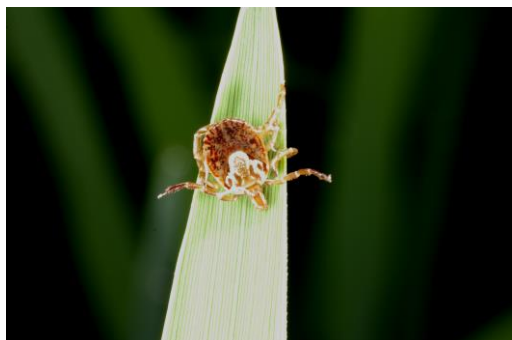
10、最近デビューしました

名前はマダニさんです。最近デビューしたばかりですが、新聞やテレビで「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」の媒介虫として大いに宣伝されています。この虫は昔からいたのですが今までは日陰の身であり存在が知られていませんでした。

この虫は野外では何処にでもいて決して珍しいものではありません。鹿などの野生動物をあてにして生活していますが、野原を走り回る犬もお得意さんです。もちろん人間さまにも寄生しますがその

確率はかなり低いです。食べ物は脊椎動物の血液のみで代用食はありません。

マスコミではこのダニに噛まれると死亡するかのように恐怖をあおって？いますが怖がる必要は



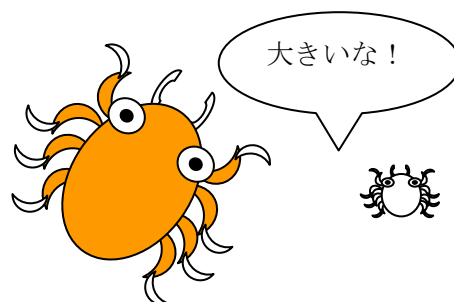
ありません。日本での死亡例は4例あるようですが、皆さんがその被害を受ける確率は0パーセントと言ってよいでしょう。宝くじで1億円当たる確率よりも低いです。怖がって野山に出かけるのを控えるのはナンセンスです。家の中に閉じこもっていても上から飛行機が落ちてくるのは防げないですよ。

このダニの脚は8本で、昆虫ではありません。どちらかと言えばクモの仲間に近いです。それゆえ、成虫も幼

虫も同じような形をしており、羽はまったくありません。移動は自分の足と敏捷性が頼りで、野原で草の先にじっと待機していて、そこを動物が通りかかるとさっと飛び移ります。

ダニの被害をよく受けるのが犬です。皮膚にのこぎり状の口ばしを差し込んで血を吸います。犬の皮膚や足に赤褐色のいぼ様物（大きくなれば1cm位になる）があればこのダニの可能性が大です。よく観察すると脚があるので分かります。しっかりと皮膚に食らいついていますので、指で引っ張ったくらいでは取れません。また、無理に引っ張ると体がちぎれて体内に口ばしが残って後日化膿することもあります。最も良いのはタバコの火などを近づけ、それを嫌って口ばしを外して逃げさせるのがよいと言われています。

このダニの仲間にはいろいろな種類が含まれており、大きさ、形、食べ物などは千差万別です。最近問題となっているマダニは英語ではTickと言って他のダニ（Mite）とは区別しています。マダニは体が大きいですが、Miteと呼ばれるダニ類は体は小さくて肉眼で見えないものが多いです。



マダニ

イエダニ

名前は聞いたことがあるが実物にお目にかかったことがないのがイエダニでしょう。その名のとおり家屋内で発生し、人の皮膚に取り付いて血を吸うので、その被害部は赤くなってかゆくなります。原因はネズミです。本来はネズミを住处とするダニですが、何らかの原因で今までいたネズミがいなくなると、住处と食物を失ったダニがやってきて住人に物乞いすることになります。このダニは小さくて肉眼では見つけることはできないでしょう。

家庭内で発生するダニにはコナダニがいます。名前の通り粉のような白いダニです。貯蔵している穀物（小麦粉、ラーメン、カツオブシ、だしジャコ、チーズなど）に発生します。高温多湿を好むため梅雨どきに発生することが多く、白い粉がうごめいていればこのダニと思ってください。

11、わが世の春、到来！

モンシロチョウが、アゲハチョウが、甘い恋をささやく季節となりました。男性陣は毎日おめかしをして女性たちの気を引くことに一生懸命です。

チョウ（蝶）は色鮮やかで美しく、ガ（蛾）は地味で褐色の衣装をまとっているイメージがありますが、これは本当でしょうか？ また、昼間に飛び回るのはチョウ、夜に現れるのはガと言う説もありますが、本当？ どちらも 70%程度はあたっていると思いますが、例外がいっぱいあります。きらびやかでどう見てもチョウのように見えるガ、くすんだ衣装をまとった野暮ったいチョウもいます。



チョウの仲間（イチモンジセセリ）



ガの仲間（ピロウドハマキ）

チョウとガの見分け方は、ひげ（触角）を見てください。糸状、櫛歯状ならガ、ひげの先に丸いものがあればチョウと判断すれば 99.9%正解です。

ガはほとんどが夜行性ですが、昼間にあたかもチョウであるかのように飛び回るの也有います。その代表がマイマイガ（幼虫名はブランコケムシとも呼ばれ、サクラの毛虫）で、6月頃にとっておきの上等の衣装（私たちの目には地味な褐色）をまとったオスが林の間をいっぱい飛び回っています。



ガの触角

チョウの触覚

それでは幼虫での見分け方はどうなのでしょう？

毛虫はガ、アオムシのように表面がなめらかなのはチョウでよろしいのでしょうか？

これはまったく当たっていません。両者の見分け方は非常に難しく、基準となるものはありません。私たち虫大好き人間は直感で見分けられますが、一般の方には至難の業です。日常私たちの目に触れる毛虫やアオムシ、イモムシの仲間は 99%がガの幼虫とみて差し支えないでしょう。私たちに馴染みのあるチョウの幼虫はアゲハチョウ、キアゲハ、モンシロチョウ、ツマグロヒョウモン、ルリタテハくらいでしょう。

話は脱線しますが、昆虫の足は6本であることはお孫さんでも知っていることでしょう。じゃ毛虫やイモムシの足は本当に6本ですか？ 胴体にうじゃうじゃと足がいっぱいあったような気がしますが。ムカデほど多くはないが胴体には5対（10本）程度はあったと思います。



日ごろ皆さんが見ているイモムシの足はすべて偽の足で、胴体をささえるためにあり、本当の足は別のところにあります。頭のすぐ後ろ、胸の部分にあり、胴体の足とは形はまったく異なっており、小さくて目立ちません。写真をよくみてください。この小さな3対の足が成虫のチョウやガになっても残ります。

12、蝶の食べ物は？

蝶と言えば、菜の花畑に舞うモンシロチョウ、「ならやまベースキャンプ」のウマノスズクサで繁殖しているジャコウアゲハ、ヤブガラシの花に集まるアオスジアゲハ、ナミアゲハなどを思い浮かべることでしょう。

蝶と同じ仲間でありながら、蛾と言えば嫌な顔をされ、蝶と言えばきれいで愛らしいイメージをもたれ、差別待遇が激しいようで、蛾の組合からも激しい抗議が届いています。皆さん蛾も愛でてあげましょう。



キマダラヒカゲ成虫

では、蝶（成虫）の食べ物は何でしょうか？ すぐに花の蜜と答えられることでしょう。正解ですが、花の蜜以外にはどんな物があるのでしょうか？ 日本の国蝶にもなっているオオムラサキ（切手にも採用）はクヌギなどの樹液が大好きで花を訪れることはありません。キマダラヒカゲも同様に、クヌギの餌場でスズメバチやカブトムシと鉢合わせすることも珍しくありません。気が弱いのか遠慮ぶかいのか、いつも彼らに一等席はゆずっているようです。

変わり種では、熟して腐敗しかけの果物から汁を吸うタテハチョウ類、路上の馬糞からジュースを吸うキチョウがいます。もちろんこれらの蝶は花蜜も吸います。

テレビ放送や昆虫図鑑には川原や湿地に集まって水を吸っている蝶の集団がよくとりあげられていますが、これはすべてオスの蝶でメスはやってきません。原因は？？ 分かっていません。また、暑い夏歩いているとき、あるいは休憩したときに手の甲や腕、時には額にとまって汗を頂戴する人懐こい蝶もいます。

蝶のお子様（幼虫）はご存知でしょうか？ キャベツの葉を食べるアオムシがモンシロチョウの子供であることを知らない人はいないでしょう。アゲハチョウ類の子供は、緑色のアオムシで頭をナゼナゼするとニューと黄色の臭い角を出すのが特徴です。

家庭菜園で最も馴染の深いのはキアゲハで、ミツバ、パセリ、ニンジンの葉にいつの間にか卵を産みつけ、産まれた幼虫は葉をもりもり食べて成長しています。



アゲハチョウ幼虫

基本的には蝶の幼虫は植物の葉を食べるので、家庭園芸愛好家からは害虫として目の敵にされています。スミレ類のツマグロヒョウモン、ホトトギスのルリタテハなど。しかし、ほとんどの仲間は樹木、野草の葉を縁慮深く少しずつ食べていますので、お目にかかる機会は少ないでしょう。

幼虫の変り種は、ゴイシシジミの幼虫です。日本では唯一の肉食性で、ササ林に発生するアブラムシ類を食べて成長します。また、ムラサキシジミの幼虫は背中から甘い分泌液を出すのでアリが回りに集まって用心棒になってくれますので、クモやテントウムシなどの強盗に襲われる心配がありません。



ホトトギスの葉を食べるルリタテハ

安全な住処と食事を与えられる蝶の子供はゴマシジミの幼虫です。ワレモコウの花を食べながら成長し、大きくなった幼虫はアリに招待されます。快適な彼らの巣でアリの子供や卵を失敬して成長しますが、体から甘い汁をだすので大切な客人として扱われ追い出されることはありません。一方、クロシジミの幼虫は、アブラムシ類の分泌液を食べて成長しますが、ある段階になるとアリさんからの招待を受け、アリの巣の中でアリからご馳走をいただき浦島太郎のように飲めや歌への生活を続けます。そのお返しとして体から甘い液体をだし、アリに喜んでもらっています。

人の世界でも、小さな頃は普通の食事をいただき、ある程度大きくなると食生活を変えてアルコールのみで生きる人もいます。

13、「みなさま、お騒がせしました」毛虫より

今年は毛虫の当たり年、庭木、垣根、公園の樹、何処へ行っても毛虫がぞろぞろ。新聞、ラジオなどマスコミでは、専門家？と称する方々がその多発原因について迷解説してくれています。もっともらしいことを言っていますが、原因不明が正しい答えかと思います。

マスコミでは毛虫軍団が一斉蜂起したかのように大騒ぎしていますが、数多くいる毛虫仲間のひとつ「マイマイガ」のみが大発生しているのであって、他の毛虫類は決して多くはなく、いつも通りの発生です。はた迷惑な！

この大発生がずっと続くように思われている方も多いようですが、今年は6月中旬をもって終わります。



幼少の頃



生長したお嬢さん

このマイマイガは、マツカレハ（マツ）やオビカレハ（ウメ・サクラ）などとともにカレハガ一家

に所属し、みんな毒刺毛を持っています。この毒はそれほどきつくなく、少し赤く腫れ、少しかゆい程度で数日後には治癒します（もちろん例外はあります）。この毛虫類が発生する期間はそれぞれ年に1ヶ月程度で、その発生時期は種類ごとに決まっています。

マイマイガは幹上に産み付けられた数百個からなる卵塊の状態越冬し、5月の連休頃に一斉に孵化します。彼らはカレンダーを持ってはいませんが、毎年孵化する時期は間違えないようです。丁度この頃は木々に柔らかい葉が開いたところで上質の餌が手に入ります。大勢の兄弟たちと連れ持って若葉に齧りつきますので、卵塊のあった樹でまず被害が現れ、しだいに周りの樹に広がって行きます。

ツツジ、ウバメガシ、サクラが大好物ですが、食べ物に関してはあまり好き嫌いを言わないようで、今年のように発生が多いと、広葉の樹なら何でもいいよと何処にでも姿が見られます。

大勢の仲間の中にはお茶目なやつもいて、樹の下を通る女性を見つけると糸を操ってすると降り、「やあ」「こんにちは」などと言って驚かせて悦にいらいます。どじな奴は男性の前にぶら下がり、「何だ！お前は！」と軽蔑され踏み潰されています。このように糸でぶら下がり風でゆれているので「ブランコケムシ」というあだ名がついています。



お母さん

美味しい餌をたらふく食べ、6月になると十分に成長し、大きいものでは人差し指くらいになっています。このでかいのはメスになる毛虫です。オスになるのは半分くらいの大きさしかありません。蚕のような立派な繭は作らず、とことん手抜きし、葉や枝に荒く糸掛けして、外から丸見えの状態下で蛹になります。

6月中旬頃に成虫の蛾になりますが、オスはモンシロチョウくらいの大きさで、全身茶色に統一しています。一般的に蛾は夜行性ですが、このオスに関しては夜ではなくて昼間にメスを求めて蝶のように忙しく飛び回っています。一方メスの蛾はその倍くらいはあり、やや太り気味で、白いドレスを着用し、飛び回ることはあまりしません。交尾後のメスは幹や枝に数百個の卵を一塊にして産卵し、その上を自分の体毛で覆い隠します。

サクラでは毛虫が8月にも多発しますが、これは別の仲間で、毒刺毛はもっていません。

14、サクラの樹は毛虫さんのごひいき

春に多発した毛虫軍団は何処かへ消えてしまい、静かになりました。来年までお休みだそうです。道端には卵を産み終えた白い蛾が転がっているのが見られます。また、太い樹の幹や壁、石垣などに直径3cm前後、淡褐色のビロード状の塊（卵）も見受けられます。

今春の「マイマイガ」の大発生は突発的なもので、虫の世界では単年度の成りあがり者に過ぎません。毎年どっと発生してサクラの樹を丸坊主にする由緒正しい大物は夏に発生する「モンクロシャチホコ」です。8月のお盆頃から姿を見せ、一族郎党寄り集まって宴会を開きます。毛虫とはいえ毛には毒はまったくありません。手でつまんでも問題はありませんが、触れる勇気のある人はまずいない

でしょう。体は赤褐色で毛はあるのですがあまり目立たず毛虫らしくありません。数十匹の虫が団子状に寄り集まって葉をぼりぼり齧りますので、枝単位に葉が消えて行きます。大きくなると長さ 5cm くらいに達し、体色も黒くなり、黄色の毛が目立つようになります。こうなると食べる量も半端ではなく、樹全体の葉が食われて丸坊主になるのもごく普通です。このような樹の下には赤褐色の糞が山のように積もり、雨がふるとそれが解けて路面が赤くなります。



幼少の頃



もうすぐ変身

丸坊主になったサクラは秋になると花をつける現象がよく起こります（狂い咲き）。サクラの他、ウメ、カイドウ、ボケ、ピラカンサなども大好きですが、カシやマツの葉は美味しくないので、間違っても食べることはありません。

サクラの樹では、マイマイガ、モンクロシャチホコばかりでなく、いろいろ多くの毛虫さんがお食事とお宿のお世話になっています。

ならやまでは彩の森に植樹したヤマザクラで今年の春に何枚もの葉を糸で綴り合せて巣をつくり、葉が食べられる被害がかなり見られました。この巣を開くと、肌色で長さ 2cm 前後のイモムシ一家が住み着いていました。姿からは蛾の幼虫のようですが、これは「サクラヒラタハバチ」と呼ばれるハチの子供です。葉を食べることからハバチ（葉蜂）と呼ばれ、母親は春先に葉の組織内に卵を産み、あとは知らん顔で子供の面倒をみません。孵化した子供たちはやむを得ず兄弟たちが寄り集まって葉を糸でつづり合わせてささやかな巣をつくりあげます。幼虫は十分に生長すると、地上において地中で蛹になります。



サクラヒラタハバチの幼虫



ウスバツバメの幼虫

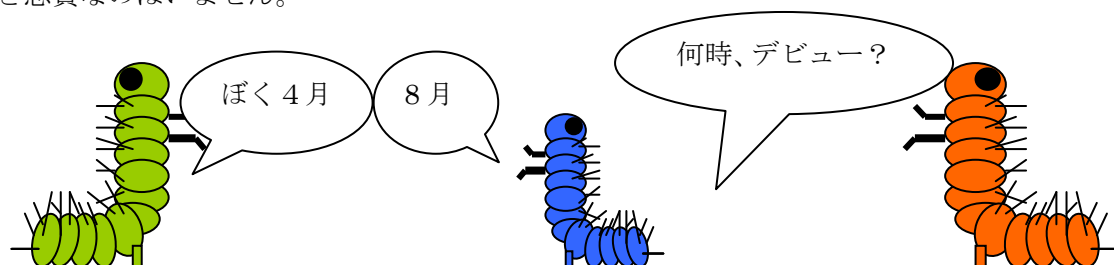
ならやま里山林の谷道にあるタンナサワフタギの葉を食べるナマコ状のシロシタホタルガの幼虫

をご存知の方がいるかと思いますが、その虫によく似たナマコ状の「ウスバツバメ」（黄色で黒い縦縞がある）が5月頃、サクラに大発生して葉を孔だらけにすることがあります。

春先最も早く発生するのは、「オビカレハ」という毛虫で、新葉が開き始めた頃に発生し、みんなで力を合わせて枝の分岐部に白い糸でクモの巣状の住処をつくります。大きくなると、幹の隙間や裏側の目に付きにくい場所で5cm くらい、黄色と青色の縦縞のある毛虫となりじっと昼間は潜んでいます。最近では先月号で紹介しましたマイマイガに押され気味です。この毛虫は毒があります。



大物は季節に合わせてつぎつぎに入れ替わりますが、サクラでは小物もたくさんおります。毒毛を備えたものもありますが、みんな単独生活で人様を騒がせるほど悪質なのはいません。



15、虫とは書くが、虫でない虫

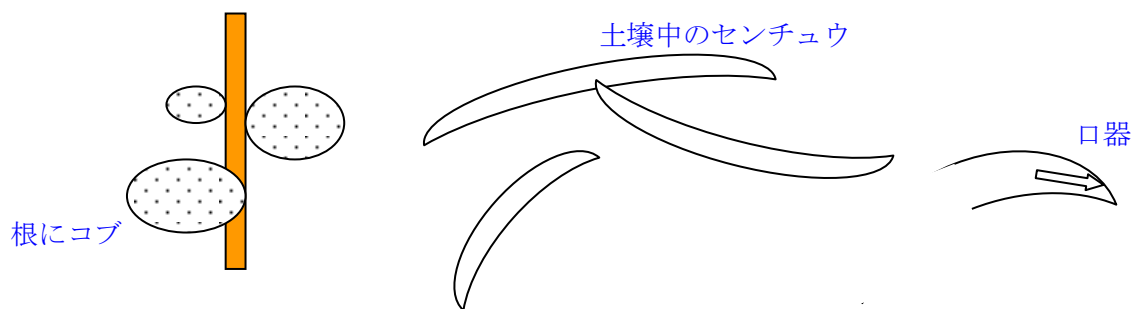
線虫をご存知でしょうか？ カタカナで書くとセンチュウ、英名ではネマトーダ、何処にでも沢山いますが、あまりにも体が小さいことと、透明であることからお目にかかることはまずありません。例外的に大きなものもありますが、通常は1mm 以下、糸屑状の細長い生き物でほとんどが土の中に住んでいます。

最も大きいのは、皆さんのお年ならご存知の回虫（カイチュウ）です。昔は私たちの体内でごく普通に養っていた生き物ですが、トイレ事情の改善から急激に減少し、今では絶滅危惧種？？と言われるくらいに珍しくなっています。可哀想な生き物に援助の手をよろしく。最近では花粉アレルギーに予防にも役立っているとか言われています。

私たちに最も関係の深いのは、ネコブセンチュウとネグサレセンチュウで、農家のおじさんや園芸愛好家からは嫌われてはいますが。どちらもミミズのような細長い生き物で、土の中に住んでいて、そこに作物が栽培されると、喜んで根に食らい尽き、ときには大家を死に導く不届き者です。針のような尖った口を根に刺し込んで養分を吸っています。成虫も幼虫も同じような形で、手足



や羽はまったくありません。セミなら1週間くらいは地上で楽しい生活が送れますが、センチュウは一生地中生活で太陽を拝むことはありません。



キュウリを収穫したときに根に数珠のように丸い瘤が並んでいるのがネコブセンチュウの被害です。ときにはピンポン球くらいの大きさの瘤が連なります。このような状態になると水を吸い上げる細い根がなくなり、株は萎れがちになります。この瘤はセンチュウが出す物質の刺激ででき、キュウリが同じ場所で栽培できない原因の一つともなっています。スイカ、メロン、ヒョウタンなどのウリ科の植物が好きですが、トマト、ニンジン、ゴボウも好物の一つです。

ダイズ、エダマメ、スイトピーなどにも瘤ができますが、これはセンチュウではなくて、根粒菌の塊で非常に有益なものですので、間違えないようにしてください。また、キャベツやハクサイの根の基部に大きなこぶし状の塊ができることがあります。これは根こぶ病という防除の難しい病気です。

ネグサレセンチュウはネコブセンチュウと同じように根に口ばしを刺し込んで養分を吸い取りますが、瘤をこしらえることはありません。被害を受けた根は細い根がなくなったり、腐ったりし、株全体がしだいに衰弱します。ダイコンでは根の表面が傷つき肌の汚い大根となります。ならやま BC で栽培するダイコンではその予防対策として作付け前にマリーゴールドを栽培しています。この植物の根から出る物質がネグサレセンチュウの繁殖を抑える作用があります。さらに、ネコブセンチュウに対してもかなり抑止力があります。我が家では、キュウリの株元にマリーゴールドを栽培しています。

センチュウの大半は土壌中に住み、腐った有機物を主食にする無害な生き物です。

変わり者はマツの樹脂道に住むマツノザイセンチュウです。いわゆるマツ枯れの原因ともなっています。また、イヌの主要な死因となっているフィラリアもセンチュウの仲間。蚊がせっせと運んでいます。

16、内弁慶、お家の中で深く潜行して、悪さをする

家庭内の昆虫と言えば、ゴキブリ、蚊、ハエが横綱級ですが、まだまだ悪さをして奥様方を悩ませる昆虫がいます。

皆様方のように少人数の家庭では、袋を開けた米は食べ終わるまでにかなりの時間がかかると思います。そこで登場するのがノシメマダラメイガと言う小さな蛾の幼虫です。米粒を糸で綴り合せて食べ散らかし、周囲に虫糞を撒き散らします。米びつなどのケースで保管していると、常に米がある状

態ですので、いたってご満悦です。成虫は小さな蛾で水も食べ物をとらずに1週間程度生存して産卵しますので、ひとたび侵入すれば米びつは快適な住処となります。

また、米に長さ3~4ミリの褐色の甲虫（コクヌストモドキ）が発生することもあります。目立つ体色をしていますのですぐに分かります。赤くても赤米の代用にはなりません。動物性蛋白としてはどうか？ 幼虫は円筒状のウジですが淡黄色ですので見つけにくいです。またこの虫によく似たノコギリヒラタムシもときどき発生します。

これらの虫は、米粒ばかりでなく、ムギ、小麦粉、菓子、乾燥した果実、ラーメン、小鳥の餌なども無断で頂戴します。それゆえ、穀物や菓子類は買いだめをしないこと、とくに米袋や米びつなどでの長期保管は食・住・安全を虫に準備しているようなものです。

コクヌストモドキと同じグループのキュウリュウチュウを記憶されてい

ますか？ 30年くらい前に生きたまま飲み込むと強壮剤になると言われ家庭での飼育が大流行しました。通常はパン屑で飼育していましたが、マニアは朝鮮ニンジンが良いと言っていたようです。最近はこの虫の噂を聞きませんがどうなったのでしょうか。

家具や柱、棧、梁、床板から細かい木屑がポロポロとこぼれだし、山のように積みあがることがあります。掃除をしてもしばらくするとまた木屑が溜まっています。これはヒラタキクイムシが材の中にいる証です。現在社会問題となっているカシノナガキクイムシや立ち木に食入するキクイムシ類とは別個のグループです。先祖からの言い伝え〔生ものは食べると中毒をする〕を守り、木は木であっても生木ではなく、乾燥材のみを選んで食べ、すでに家具として加工された材が好きです。

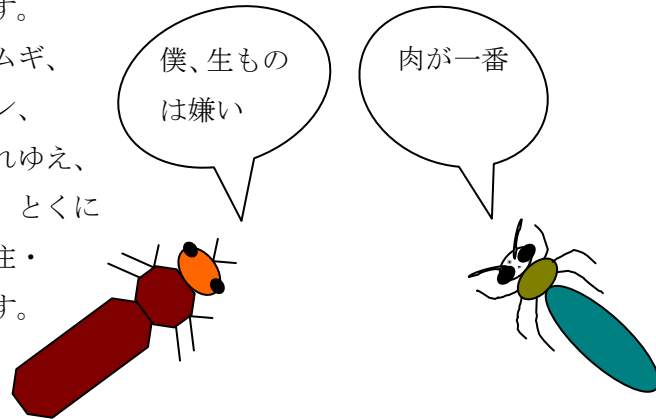
この虫が最も好むのはラワン材で、ついでナラ材です。飛来した成虫は材の導管の切れ目の中になく産卵します。孵化した幼虫はトンネルを掘り下げて行きますが、近代工法をもちいるせいか、木屑や虫糞は外に出さずに坑道内にうまく貯めこみますので、中がポロポロになっていても外からは被害はまったく分かりません。やがて成虫となり、外へ飛び出すときに溜め込んだ木屑・虫糞を一気に外に放り出しますので、突然被害が現れたかのように見えます。

竹製品は最近減少していますが、竹の中を食い荒らして内部をポロポロにする虫もいます。タケトラカミキリやタケナガシンクイが犯人で、ラワン材にはつきません。

家の中でアリにチクット刺されたことはありませんか？ 畳の上をふんぞり返って偉そうに歩いているアリが見つかります。これはアリではなくてアリバチという虫です。肉食性で通常は畳に発生するシバンムシ（5ミリにも満たない甲虫の仲間）を餌としています。その通路を妨げたので怒って噛み付いたのです。一つ屋根の住人として仲よくしたいものです。

17、イモムシごーろご

イモムシ（芋虫）をご存知でしょうか？ 文字の通り、サツマイモやサトイモなどの芋類によく発生する虫です。





肥満児と言えるほど丸々太り、人差し指くらいの太さがあり、お尻に1本の角があるのが特徴です。体の色は緑色のタイプが多いですが、黒色、褐色、黄色などのタイプもあります。同じ種類であっても体色の異なるものがあります。体の側面に目玉のような模様をあしらったおしゃれ？な虫もいます。

しゃなりしゃなりと歩く姿を見ているかぎり、温和な虫のようですが、力は非常に強く、気に入ら

ないと激しく体を振り動かします。

住処となる植物は、野菜、花、樹木など多種多様ですが、談合したのか餌植物は虫の種類ごとにうまく振り分けられています。あれもこれも欲しいと言う欲張りな虫はいません。

皆様へのデビューは地から湧き出したのか、空から降ってきたのか、突然起こります。昨日までいなかったのに今朝見ると大きなイモムシが葉をもりもり食っていたという具合です。本当は少し前から発生していたのですが、体が小さくて食べる量も僅かであったので皆さんが気づかなかっただけです。卵から孵化して何度か脱皮しながら大きくなりますが、最後の脱皮で一気に体が大きくなり食べる量も増えることから発見につながります。

皆さんが気持ち悪いと感じるほどに大きく成長すると、餌場を離れて地面へ降り、体を伸び縮みさせながら土の中に潜り込みます。やがて地中で周囲の土を押し固めて空洞を作り、その中で変身して赤褐色の蛹になります。

この蛹の状態です。冬を越し、翌年餌となる植物が葉を茂らせ、食べ頃になった時期を目がけて成虫の蛾となります。

成虫は大きな蛾で、蛾の仲間内では大きさの点では大関格です。胴体は非常に太く、丈夫な三角翼の羽を持っています。ジェット機タイプと言えるでしょう。その体の太さからかスズメガ(雀蛾)と呼ばれています。夜行性で夜になると目をきらきら光らせてわが子の餌になる植物を探し回っています。



卵は丸い球で、仁丹よりも大きく、透明～淡緑色、母親の蛾は餌の植物の大きさを勘案して1粒ずつ葉の上に産卵して行きます。幼虫が餌不足になるほどの沢山の卵を産むことはありません。

よく発生する代表的なものをあげると、

セスジスズメ:羽によく目立つ白い筋があります。幼虫は黒色タイプで目玉模様があり、サトイモ、ホウセンカ、ヤブガラシが好物です。

エビガラスズメ:胴体にエビのように横縞状に赤紋があります。幼虫は緑色、黄褐色、黒色タイプなどいろいろあり、サツマイモ、アサガオが好物です。

メンガタスズメ:胸の背面に人の顔のような模様があります。幼虫は緑色タイプが多く、ナス、ダ

チュラ、ゴマなどが好きです。

オオスカシバ:羽の鱗粉が全て落ちて透明です。
幼虫は緑色でクチナシの葉のみを食べます。

飛びながら蜜を吸うオオスカシバ



18、私たちは虫の世界の警察官

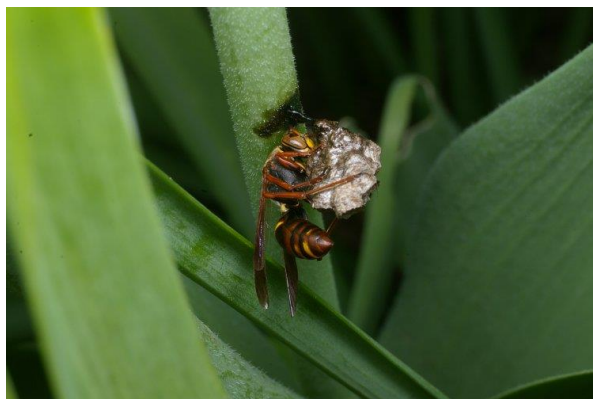


動物の世界は、一つの動物のみが異常に増えないように制御機構が働いています。ただし人間と野生鹿のみは例外的に大繁殖しているようですが。

虫の世界でも増殖抑制システムがあります。天敵という警察組織？です。担当官がさぼっていたのか、今年はその抑制作用の働きが不十分で毛虫が大発生しましたが、これも時間が経過すれば収まってくることでしょう。

天敵には捕食性昆虫と寄生性昆虫があります。捕食性昆虫は、テントウムシのように餌となるアブラムシを頭からムシャムシャ食べたり体液を吸い取ったりします。一方の寄生性昆虫は餌となる昆虫の外皮に食らいついたり、体内に住みこんで内部の臓器を食べたりします。

捕食性昆虫と言えばアブラムシを食べるテントウムシを思い浮かべることでしょう。ヒラタアブの幼虫、クサカゲロウなども同じようにアブラムシを餌としています。カマキリの小母さんやトンボの小父さんも虫を餌としています。虫なら害虫、益虫無関係に何でも片端からたべまくるので益虫としての貢献度はテントウムシに比べ劣ります。



アオムシの有力な取り締まり官はアシナガバチで、力強いあごでアオムシの頭に齧り付き、噛み砕き丸めて団子にします。これは巣で口を開けて待っている子供達のお土産になります。家庭菜園をされている皆さん、キャベツ畑にアシナガバチがやってきた時には怖がらずに歓迎し、お茶の一杯も差し上げてください。

キャベツのアオムシに写真のような黄色の塊がくっ付いているのを見たことはありませんか？これはアオムシサマライコマユバチと勇ましい名前がついたハチの繭です。アオムシにとっては実に嫌な虫です。長さ数ミリの非常に小さなハチの母さんがまだ幼少のアオムシの体に注射をするように

産卵管を突き刺して数十個の卵を体内に産みこみます。孵化したハチの子は、知恵を絞ってアオムシ自身の成長にあまり関係のない部分を食べよう心がけますのでアオムシは順調に生長します。アオムシがぼちぼち蛹になろうかとする頃にはハチの子も成長を終え、ある日一斉に外へ這い出します。その場に立ち会いますと、アオムシが子供を産んだような感じにも見えます。兄弟そろって外に這い出したハチの子は直ちに黄白色の繭を作



って蛹になります。ながらく無償でハチの子を体内で養っていた親切なアオムシは蛹にもなれず、蝶にもなれずそのまま死んでしまいます。可哀想

ですね。このハチがアオムシの大発生を抑えています。

このような体内に住み込む居候を寄生性昆虫と言います。ハチの場合は寄生蜂、ハエの場合は寄生蠅と呼んでいます。

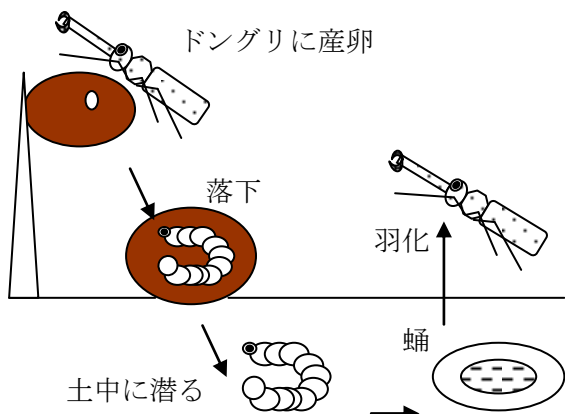
アオムシサムライコマユバチは集団寄生でしたが、体がもっと大きな寄生蜂や寄生蠅では一匹の大家に1～数匹の店子しか住めません。多すぎると餌不足で共倒れとなり、母親の責任が問われます。産卵にはすでに店子が住んでいるかどうかの見極めが大事で、母親も空き家探しが苦勞の種です。

19、ドングリは住みかとお食事どころ

秋にドングリを拾い集めて箱に入れておくと黄白色で柔らかいウジのような虫が丸い穴をあけて出てくるのを経験されていることでしょう。

この虫さんのお名前をご存知ですか？ この虫はシギゾウムシと言う甲虫の幼虫です。ドングリ1個がこの幼虫の縄張りで一国一城の主です。この幼虫には足は一本もありません。よく観察してください。体全体がゴムのようになめらかで、体全体に横ひだがいっぱいあり、そのひだを伸び縮みさせてあたかも足で歩いているかのように上手に移動します。

体は柔らかいですが頭部は頑丈につくられ、1対の鋭い牙(口器)を備えています。この牙でドングリの硬い皮に孔を開け、外へ這い出してきました。虫を手の拳の中に入れても噛まれることはありませんが、頭と牙で力強く押してなんとか逃れようとしているのが分かります。



ドングリから這い出した幼虫は土の中へ穴を掘って潜ります。5～10cm の深さの所で、体を上手に使って回りの土を押し固めて空洞を作りその中で一休みします。栄養価高いドングリで育っているのもう何も口にする必要はなく、翌年の7月頃まで悠々自適のお昼寝？を過ごします。

7～9月の頃、快適な地下住宅内で蛹になり、やがて成虫となって地上へ這い出します。この頃には美味しそうなドングリの実が樹にいっぱい稔っています。

成虫は頭の先が細長く口ばしのように突き出ている、その先端部に丈夫な牙を備えています。この仲間はみんな頭の先が細長く前方に突き出ているので「ゾウムシ」と呼ばれ、とくにドングリが好きな成虫の頭は針のように長く尖っているので、鳥のシギの口ばしを連想して「シギゾウムシ」と呼ばれています。この針のような頭の先の牙を使ってあたかもドリルで穴をあけるように硬いドングリの皮に孔を穿ち、その孔の中に産卵します。

幼虫の成長速度は非常に速く、ドングリが落下する頃にはすでに十分大きくなって、何時でも外に這い出す準備が出来上がっています。この虫は自分の食べ残しや糞を全てドングリの中に溜め込んでいますので、外見上は正常に見え、仮に外からノックしても返事はなく、在、不在は分かりません。

シギゾウムシの仲間は、食べ物には非常に神経質でドングリなら何でも食べるわけではありません。種類ごとに食べる物を決めているので、お互いに競合することはありません。皆さんが最も目にするクヌギのドングリにはクヌギシギゾウムシ、コナラにはコナラシギゾウムシ、クリにはクリシギゾウムシがそれぞれ縄張りをもっています。シイにつく種類もありますが数が少ないため私たちとは競合しないようです。

クヌギやコナラなど小さなドングリでは1つの実に対して1匹が定員ですが、大きなクリの実では1匹ではなく、複数の虫が住み着くことができます。

20、一国一城の主

前回シギゾウムシについて話しましたが、ゾウムシにはまだまだ沢山の仲間がいます。みんな食べ物は植物食で肉食はしませんので、神戸牛や松阪牛にも無縁です。成虫は新芽や柔らかい葉が主食ですが、幼虫は葉、果実、樹皮、茎、根など種類によって食べる物がまったく異なっています。



5～6月頃、野山に出かけるとクヌギやコナラの葉先に長さ1cm 前後の円筒形をしたものがぶら下がっているのを見かけたことはありませんか。江戸時代の人、恋文や直訴など内緒の手紙（巻紙に記した）をそっと地面に落していったので、その形がこの巻紙に似ていることから落し文と言われています。虫の世界では、手紙ではなくてオトシブミと呼ばれるゾウムシの幼虫が住んでいるお宿兼お食事どころです。

成虫は1cm にも達しない小さな甲虫で、先端が象の鼻のように長く伸びてはいますが、他のゾウ

ムシ類とは異なって頭ではなく胸の部分が長くなっています。手先？が非常に器用で、人間世界にあてはめるとタンスや引き出しを上手に作る指物師といったところですよ。一枚の葉のあちらこちらを歯で噛み切って、先端から順次折り畳んで丸い円筒に仕上げます。もちろん設計図や下図はありませんが、きちんと予定通りの物が出来上がります。

この作業は、見世物でもボランティアでもありません。彼女らにとっては大切な作業です。まずこの中心部に丸い卵を産み、それを傷つけないように包んでゆきます。卵から孵化した幼虫は母親が苦勞して準備してくれた葉を少しずつ食べながら生長します。包みはしっかりと巻いてあり、外側は堅くなっても内部は湿り気あり、歯がたたなくなることはありません。この包み 1 個で幼虫が育つだけの食料が確保されています。

オトシブミの仲間にチョッキリゾウムシというのがいます。新芽の先端部に卵を産みこみ鋭い歯でその下をチョッキリ！と切り取ります。春先サルスベリ、バラ、ウバメガシの新芽が黒くなって枯れるのはこの虫のせいです。

変わり者は晩秋～早春に発生するヤサイゾウムシです。名前の通り、ハクサイやホウレンソウ、ミズナなどの葉の隙間に入り込み、親子水いらずに鍋を囲んでいます。それを知らずに収穫してそのまま食卓まで運ばれると、レストランや給食のサラダの中に「虫がいた！」と騒がれる原因となっています。虫にとっては実に迷惑なことです。

ゾウムシであるにも関わらず、鼻の先が象になっていないのもいます。マメゾウムシと呼ばれ、もっぱら豆粒の中で幼虫が育ちます。お酒のあてにもなる炒ったソラマメの実に丸い穴があいていることがあります。これは、成虫がまだ畑で栽培されている豆莢内の豆粒に産卵し、孵化した幼虫が豆粒内で成長し、収穫され乾燥された頃に成虫となって穴をあけて飛び出したからで子供には責任も罪もありません。



21、寒さもなんのその

ならやまで活動しておられる皆さん、12月の活動日にコナラ林の陽だまりで群がって飛びかっていた茶色の蛾を覚えておられますか？ まるでチョウの乱舞のようでしたね。

12月と言えば季節的には初冬で寒さも日増しに厳しくなっており、昆虫たちはみんな樹の皮の下、草むらの中、土の中ですでに冬越しに入っています。しかし、この蛾のみがどうしたわけか飛び回っています。この蛾に言わせると、これが正常で一番大事な時だそうです。

この蛾は「クロスジフユエダシャク」と呼ばれています。体全体は淡褐色ですが、羽根に黒い帯模様があって冬に発生し、幼虫が木の枝そっくりの



形をした尺取虫であることからこの名前が付けられたようです。

この飛び回っている褐色の蛾は全てオスです。メスの蛾の羽は小さく退化していて飛ぶことはできません。樹の表面を歩きまわっていますので、目に付くことはほとんどありません。

メス成虫は樹の枝や幹の上に産卵し、卵の状態ですぐ冬を越し、翌春幼虫が孵化します。幼虫は胸部に小さな脚が6本（3対）と腹部末端に4本（2対）の脚があるのみで、中央部にはありません（アオムシやイモムシは腹部中央にも8本程度の脚がある）。そのため、歩くときは胸の足で枝をつかんで腹部末端の脚を前方へ移動、次に腹部末端の脚でしっかり枝をつかんで体を支え、胸部の脚を外して前方へ移動させます。体全体を伸び縮みさせて距離を測っているかのように見えますので尺取虫という名がつけられています。



サクラに発生する「チャバネフユエダシャク」も成虫の蛾が12月頃に発生しますが、同じようにメスは羽が退化しています。生駒山や矢田山のサクラでごく普通に発生しています。

尺取虫仲間全体から見ればこのように冬に発生するのは少数派で、ほとんどの種類は春から初夏にかけて樹木で発生します。体型、色彩、模様など種々雑多で非常に綺麗な虫もいます。ほとんどの種類

は控えめで木の葉を丸坊主にすることはないので発生しても実害は低く見過ごされています。しかし、マサキにつく「ユウマダラエダシャク」はしばしば多発して葉を丸坊主にすることがあります。



話は戻りますが、冬に発生する生き物に「ハクサイハダニ」と呼ばれる綺麗なダニがいます。名前の通り、ハクサイ、ダイコン、ホウレンソウなどに突発的に発生します。

22、狭きとも楽しき我が家

ただ1枚の小さな葉を住みかとしているいたって小食の昆虫を紹介します。その代表選手がハエの仲間です。皆さんはハエと言えばイエバエやキンバエに代表される食べ物にたかる蠅、ゴミや腐った物の中に発生するウジを連想されることでしょう。今回取り上げるハエは薄っぺらな葉の中に潜って生活しているので、ハモグリバエと呼ばれ、葉潜蠅とも書きます。成虫のハエも幼虫のウジも汚い物にまったく触れないので、手足は洗ったようにいつも綺麗です。でもお百姓さんには嫌われています。

皆さんに最も身近にいて馴染みのあるのは、エンドウの葉に潜るナモグリバエ（菜潜蠅）です。葉に曲がりくねった白い筋をつけるのが特徴です。虫の発生が多いと、葉全体が白い筋で埋まってしまって白っぽくなります。エンドウでは必ずと言ってよいほどごく普通に発生します。この虫は食べ物には好き嫌いがなく、いろいろな野菜や花の葉に潜りますが、樹木の葉は堅くて歯が立たないのか？お呼びではありません。もし樹木の葉に見られた場合は他の昆虫と思ってよいでしょう。

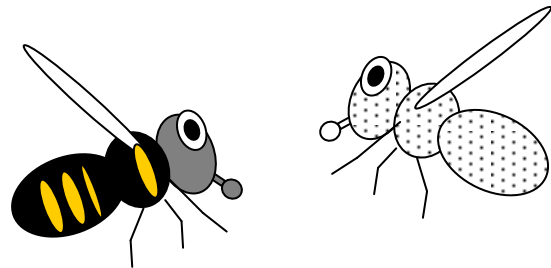


成虫は灰色の小さなハエ（体長は 2mm 前後）で目立たないのでお目どおりすることはまずありません。お尻に葉を切り裂くための特上の刃物？を持っており、それで葉の表面を傷つけ、そこから染み出てくる汁液を舐めて主食としています。そのため、葉には直径 1mm 前後の斑点のような丸い色抜けが起こります。発生が多いと葉に点々と被害症状が現れますが、通常は気づかないと思います。また、産卵も同じように葉を傷つけて葉内に行います。

幼虫は黄緑色のウジで、脚はまったくありません。体を伸び縮みさせながら葉の中（表皮と裏皮の間）でトンネルを掘るように食い進みます。トンネル工の本領発揮です。その食った痕が白い筋となって残りますが、1枚の葉に何匹もの幼虫が食い込むと葉全体がトンネルで占められて白くなり、狭きとも樂しき我が家が登場します。

十分に生長した幼虫はトンネルの片隅で、褐色で先の尖った俵のような蛹になります。

ナモグリバエの仲間には体に黒と黄色のツートンカラーの素敵な服装をしたマメハモグリバエやネギハモグリバエもいます。



ネギハモグリバエは葉ネギ栽培のお百姓さんにとってはにつくきハエ野郎です。貴重な青い葉に遠慮なく白い落書きをするので、商品価値が大幅に下落します。

10 年ばかり前から海外から密入国したのが、マメハモグリバエ、ナスハモグリバエ、トマトハモグリバエのトリオです。成虫のハエは色彩、形などはそっくりで、まるで双子ならず三子のように見分けは困難です。当初はハウス栽培の野菜で発生していましたが、今では露地の野菜畑でも大手を振って飛び歩いています。

怖いものなしのようですが、やはり苦手はあります。小さなハチがこの幼虫の体内に寄生します。多いときには半数のハエがこの天敵の餌となって消えてしまいます。一方この天敵は農薬には弱いので、薬剤散布を頻繁に行っている熱心な農園では役に立つことはできません。



2010～2014 年に会報に連載した「やさしい昆虫講座」
を一部修正、写真を追加したものです。

2014 年 3 月 木村 裕